様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２４５１０３４５

研究課題名（和文）タイ華人宗教世界の解明―祭祀・祭礼の実態調査を通じて―

研究課題名（英文）Studies of religious world of Chinese descendents in Thailand: Their seasonal rituals and ceremonies

研究代表者
伊藤　友美（ITO, Tomomi）

神戸大学・国際文化学研究科・准教授

研究者番号：４０３３７７４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：本課題において最もまとまった成果となったのは、中国系タイ人女性大乗仏教比丘尼に関する問題である。中国・台湾・韓国・ベトナムなど、大乗仏教の伝統を継承する国々では、女性が比丘尼として出家する慣行が今日まで継承されているにもかかわらず、上座仏教を基幹とするタイでは、タイの国家サンガに属する大乗仏教の宗派である華宗と越宗には、比丘尼の所属は認められていない。そのため、タイ人女性が大乗仏教の比丘尼としての出家を希望する場合には、海外のサンガを通じて出家し、国内では国家サンガから独立して活動することを余儀なくされるという点で、上座仏教の比丘尼と同様に問題を抱えているということが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Among the several issues explored through this project, it was the issue of Chinese-Thai women who ordained as Mahayana Buddhist bhikkhunis that highlighted a significant aspect of Chinese-Thai religious world. In China, Taiwan, and most other Mahayana Buddhist countries, bhikkhuni ordination is inherited up until today. However, in the Chinese Order that affliated to the national Thai Sangha, no Mahayana Buddhist bhikkhuni member is allowed. Therefore, Chinese-Thai women who seek Mahayana Buddhist bhikkhuni ordination have to ordain through a foreign sangha and conduct their religious activities in Thailand, independently from the national Thai Sangha. Their situation is strikingly similar to that of Thai women who have no place in the national Thai Sangha, which does not sanction Theravada bhikkhuni, because of the disruption of bhikkhuni lineage in Theravada Buddhism. Lack of secure place in a publicly accepted sangha, bhikkhunis' living has to be insecure.

研究分野：タイ地域研究

キーワード：タイ　華人　宗教

１．研究開始当初の背景

研究開始当初、タイ華人の宗教について書かれた包括的モノグラフは、ほとんど皆無であった。Skinner (1957)、村嶋（1996）をはじめとする代表的なタイ華人史研究は、タイ華人のタイへの移住と彼らを巡る政治的統制・政治運動を中心に論じており、宗教にはほとんど触れていない。一部の研究は、華人の信仰の拠点となる寺廟を取り上げているものの、その考察の対象とされているのは、寺廟の創立年や略歴、創立者集団の出身地・言語グループ（Ho 1995; 段 1996; Franke 1998）、ないしは政治的権力・利害対立の局面（小泉 2007）であり、彼らの信仰や宗教実践の中身にまでは踏み込んでいない。

タイ華人の宗教の一側面を扱った研究としては、吉原による徳教についての研究（1997, 2000）や Cohen によるプーケットの華人の九皇斎と呼ばれる祭礼に関する研究(2001)がある。吉原の研究は、タイ華人の宗教団体の一つである徳教に特化したもので、徳教とより広範なタイ華人の宗教観・宗教実践との関連性や相違点を明確にしていないため、より一般的なタイ華人の宗教的営みを解明する契機を欠いている。Cohen による研究は、観光人類学の観点から、九皇斎祭礼期間中の斎戒（ベジタリアンの食事を取ること）の実践やトランス状態になったシャーマンによる自傷行為を伴った呪術的パフォーマンスを中心に考察したものである。確かにこうした側面は、国内外の観光客の関心を引き、高い経済的効果を生み出しているが、Cohen の研究はその背後にある中国宗教の観念を十分に捉えきれていない。総じて、吉原や Cohen の研究は、突出した特徴をもったケースのみを扱っており、華人街の寺廟及び華人家庭で見られる日常的宗教実践や年中行事の祭礼、そしてそれらの宗教実践を支える宗教的世界観を解明したものではないといえる。

上座部仏教の枠組みにおけるタイ人の宗教実践と社会構造が明快な図式をもって体系的に明らかにされているのと比べると、多種多様な神仏を祀り、華やかな色彩で飾られた華宗寺院や中国廟で線香を手に祈りをささげるタイ華人の宗教観・宗教実践は、未だ謎めいた不可解な存在にとどまっていた。

２．研究の目的

本研究は、バンコクの寺廟・斎堂・家庭で行われる春節、中元節、九皇斎などの祭祀・祭礼について、徹底したフィールド調査と詳細な民族誌を作成することにより、ほとんど未解明の領域であるタイ華人の宗教世界の全体像を提示することを目的とする。それらの祭祀・祭礼で招来される道教の神々や仏教の菩薩、祖霊、孤魂などの名称・性格・位置づけ、そしてそれらに対する儀礼や供物の詳細を明らかにすることにより、中国仏教・道教・民間信仰の様々な神仏で混然とした宗教世界の内実に迫ることができる。また祭礼の主体となる様々な宗派・言語集団と祭礼実施形態を比較検討し、未知の領域の分節化・モデル化を図ることを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、萬望観音仏堂を中心に、バンコクの華人街とされるサンペン、ヤワラート、バーンラック、タラートノーイとその隣接地区にある龍連寺、普門報恩寺、順興宮、七聖媽廟、玄天上帝廟、天華医院（病院と廟を併設）、報徳善堂などの主要な寺廟・斎堂で行われる春節、元宵、清明節、端陽節、中元節、中秋節、九皇斎、冬至、答謝鴻恩の祭礼、そして各寺廟で祀る道教の神々や仏教の菩薩の聖誕日等のうち、宗派や集団の特徴の解明につながると考えられる祭祀・祭礼について調査する。その際、斎食（宗教実践としてベジタリアンの食事を取ること）を厳格に課す先天大道の多様な分派、斎食の実践をより柔軟に行う斎大と呼ばれる宗派、タイにおける「正統な」中国仏教を代表する華宗寺院、斎食を行わないその他の寺廟では、宗派・宗旨の違いに応じて、どの祭祀・祭礼の実施が選択されているのか、また同じ祭礼を実施する場合には、実施形態や意味付けにどのような違いがみられるのかに着目する。

さらに、潮州・福建・広東・客家・海南など寺廟を設立した言語集団の違いや祀られている主神の性格の違いによって生ずる差異についても、注意深く考察する必要がある。タイ華人の祭祀・祭礼のもととなる中国の農歴と西暦との間には、毎年、若干のずれが生じるため、年度ごとに授業その他の職務に支障のない範囲で、調査対象とする祭礼を選択し、祭礼ごとにタイに渡航して、調査を実施する他、重要な祭礼については、複数年にわたって同じ祭礼を異なる寺廟で調査し、比較検討するという手法によるアプローチを計画した。

しかし、研究を一時中断する事由が生じ、その後、当初計画通りでのアプローチは現実的に困難となった。代わって、以下に挙げる3つの手法を試みた。

第一に、1920 年代から 30 年代にかけてタイで刊行された英語・中国語の新聞のマイクロフィルムを参照しながら、当時、バンコクにある著名な寺廟が行っていた祭礼に関する記事や、中国系タイ人の家庭で行う年中行事に関する記事を収集し、フィールド調査の

経験を補完する祭礼に関する知識や過去の実践形態の探求を試みた。

第二に、バンコクにおけるインフォーマントのネットワークを通じて、中国仏教の比丘尼と在家仏教協会にアプローチし、中国仏教の観点からタイ華人社会の文化と歴史の解明を試みた。

第三に、中国系タイ人のルーツである中国の広東省潮州・汕頭などの地域と、また中国系タイ人が継承する宗教と近似した宗教が現代においても盛んに実践されている台湾を訪問し、中国南部沿海地域に由来する中国宗教の実践に関する中国語研究文献の収集とタイにおける実践理念・形態に関する比較の視点を探った。

４．研究成果

上述３．研究の方法において述べたように、本研究は、計画当初の方法にしたがって研究を進行することができず、実施可能な範囲で代替的手法を探りながら実施する形をとった。上述の３つの手法を試みる中で、第一と第三の方法については、成果が断片的であり、論文の形で発表するに至っていない。今後、継続的な調査によって全体像の把握に努めたうえで、研究成果の公表につなげていきたい。本報告書では、すでに成果の一部を研究発表（〔学会発表〕②）している、タイにおける中国仏教の女性出家者である大乗仏教比丘尼に関する論考を中心に、報告していきたい。

タイにおいて、タイ国籍とタイ国民アイデンティティを持つタイ人の中で、中国系のルーツを持つ国民の比率は高く、一説によるとタイ国民の 40%は、少なくとも一部に中国系の祖先をもつといわれる。しかし、各個人の親族バックグラウンドと宗教実践に関する聞き取り調査を通じて、中国系の祖先をもつことと、中国宗教を実践することは、必ずしも直結しているとは限らないことが明らかとなった。例えば、両親ともに中国系でありながらも、自身はタイ上座仏教の僧侶として名声を獲得するケースもあれば、まったく中国系のルーツを持たない孤児が中国宗教を実践する斎堂で養育され、斎堂継承の担い手となるケースも存在した。一般的には、中国宗教に由来する年中行事を継承・実践しながら、タイ上座部仏教の寺院における布施・聞法・瞑想などの宗教活動にも参与する中国系タイ人の家庭が数多くみられる。こうしたコンテクストにおいて、中国系タイ人は、タイ上座部仏教ないし中国大乗仏教の僧侶の個人カリスマ、著作、説法等による宗教的啓発を受けることや、継続的な寺廟・斎堂等における宗教活動参与を通じて、いずれかの宗教への強固な帰属意識や宗教アイデンティを選択的に獲得していくということができる。本研究において、バイオグラフィーの聞き取り調査を行った中国系タイ人女性で、タイで大乗仏教の比丘尼として活動する人々は、いずれもタイ上座部仏教・中国大乗仏教両方との接点を有し、それぞれの宗教的体験や「師」との出会いを通じて、大乗仏教の出家者となることを選択していた。

インタヴューを行った中国系タイ人大乗比丘尼の一人によると、タイで活動するタイ人大乗比丘尼は、恐らく 20 名程度に過ぎず、タイ社会における存在感や影響力は、決して大きいとは言えない。しかし、その存在は、タイにおける仏教とジェンダーの構造的問題を強く反映しているといえる。タイで主流をなす上座仏教は、１０世紀末のスリランカで仏教王朝が滅び、仏教サンガが壊滅を期した際に、女性出家者の比丘尼サンガの継承が途絶え、以降、比丘尼は存在しないとされ、現在に至るまで、タイの国家サンガの中に上座部の比丘尼は存在しない。これに対し、中国・ベトナム・台湾・韓国などの大乗仏教圏では、女性が比丘尼として出家する伝統が継承されているにもかかわらず、タイの国家サンガの一部として大乗仏教の出家者が帰属する越宗・華宗には、男性の比丘のみしか存在せず、女性の大乗仏教比丘尼は存在しない。そのため、タイ生まれの中国系タイ人女性で、大乗仏教の比丘尼として宗教生活を送る女性たちは、いずれも中国・台湾・ベトナムなど、タイ国外の大乗仏教サンガを通じて出家し、タイに帰国して活動している者である。これは、上座仏教において比丘尼サンガ復興を志すタイ人女性たちが、その志を共有する海外の仏教サンガを通じて受戒することにより、比丘尼としての出家を果たし、タイの国家サンガに帰属することなく、独立して宗教者としての活動を行っているのと、同様であるということができる。

近年、海外で上座仏教の比丘尼として出家したタイ人女性たちは、タイ社会の中で一定の認知を得て、その宗教的役割を果たすことが可能になっているものの、インタヴューを行ったタイ人大乗仏教比丘尼の中には、上座部では比丘尼となることが公式に認められていないために、女性が男性と同等の出家ができないため、比丘尼の存在が継承されている大乗仏教であれば、比丘尼としての出家が実現可能であるために、大乗仏教の哲学に惹かれたというよりも、比丘尼という選択肢が可能であるために、大乗仏教を選んだと述べる女性も存在した。しかし、大乗仏教の比丘尼として出家することは、上座部の比丘尼として出家することよりも、社会的疑義を受ける機会は少ないとはいえ、タイ国内では、国家サンガの成員として受け入れられないため、その社会的基盤は、海外で上座部の比丘

尼として出家したタイ人女性とほぼ同様に不安定なケースがあることが分かった。

タイで活動する大乗仏教の比丘尼は、その所属形態に着目すると、次に挙げる3つのタイプに分類することができる。第一に、中国や台湾などの大寺院で比丘尼として出家したのち、出家を認可してくれたサンガとの結びつきはそれほど強くなく、タイで独立して大乗比丘尼として活動するケースである。この場合、その比丘尼に個人カリスマや呪術的能力の高さが認められる場合、タイで多数の信者と弟子を獲得し、大規模な寺院組織を形成するケースも存在するが、タイで所属するサンガがないために孤立し、大乗比丘尼としての活動に行き詰まりを見せるケースも存在した。

第二に、台湾の佛光山などのように、世界各地に支部を持つ大規模な大乗仏教サンガの組織で出家し、その組織の一員として、タイでその支部の運営を担いながら、大乗比丘尼として活躍するケースがある。こうしたケースは、組織からのサポートが十分にあり、最も安定的に修行生活を送ることが可能であることが分かった。

第三に、佛光山のような国際的大サンガ組織で比丘尼として出家して、組織が求める要件の修行を修めたのちに、もともとタイで所属していた斎堂などに戻り、佛光山の組織の活動を一定程度果たしながらも、自身の斎堂で独自の活動を行うというケースが存在した。こうしたケースでは、タイ華人が継承する道教と大乗仏教が混交した宗教世界に、より理念的な大乗仏教の実践をもたらし、斎堂の宗教活動に大きな変革をもたらしているケースも存在した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

① Tomomi Ito, “Complementing the Loss of Ordained Women in Thai Buddhism: Ubasika Ki Nanayon and Buddhadasa Bhikkhu’s Female Disciples.” 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要『国際文化学研究』第48号、2017年、pp. 1-16.（査読無）

〔学会発表〕（計　2　件）

① Tomomi Ito, “Thai Buddhism and Buddhadasa’s Teaching Under the Military Regime from 1958 to 1973: The Legacy.” The 8th International Buddhist Research Seminar & The 2nd International Conference on Buddhadasa Studies, 2017年5月25日、バンコク（タイ）

② Tomomi Ito, “Diversity of Mahayana Buddhist *bhikkhunis* in Thailand: roots, affiliation, and status.” The 14th Sakyadhita International Conference on Buddhist Women, 2015年6月20日、ジョグジャカルタ（インドネシア）

〔図書〕（計　3　件）

① 伊藤　友美　他、めこん、『上座仏教事典』、2016年、686（108-109, 332, 343-344, 396-397, 457-458）

② 伊藤　友美　他、明石書店、『タイを知るための72章』第2版、2014年、438（155-158）

③ Tomomi Ito, et al, State University of New York Press. *Eminent Buddhist Women*. 2013, 278（55-60）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤　友美（ITO, Tomomi）
神戸大学・大学院国際文化学研究科・准教授
研究者番号：４０３３７７４６

(2)研究分担者
なし（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

なし（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
なし（　　）